

諸君ヨ一人一人大切ナリ

奨励	木原 活信【きはら・かつのぶ】
奨励者紹介	同志社大学社会学部教授 〔研究テーマ〕福祉哲学、福祉思想史、精神保健福祉論

徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだした。そこで、イエスは次のたとえを話された。「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか。そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』と言うであろう。言っておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある。」

(ルカによる福音書 15章1ー7節)

はじめに

「諸君ヨ、一人一人大切ナリ」という印象深い言葉が、同志社大学の社会学部のある新町校地の建物の壁面に刻まれています。というよりも、「諸君ヨ、一人一人大切ナリ」は、最近、同志社のエレベーターにも貼られていて、すっかりお馴染みになりつつある言葉ですね。この言葉によって、コロナ禍でできるだけエレベーターを身体の不自由な方に優先してもらい、健康な学生が使用を控えて密を避けるよう促そうとしているのでしょうか。一方で、「一人一人大切ナリ」という言葉が本来の意味を離れて、ややインフレ状態気味で軽々に使用されるとなると、その真意がわかりづらくなってきたようにも思います。

そこで、本日は、この言葉の真意について、Doshisha Spirit Weekの一環として歴史的起源に迫り、それに連動する聖書のモチーフから、その言葉の真意と背景について改めて考えてみたいと思います。

この言葉の起源と真意

「一人一人大切ナリ」は、新島襄の熟慮した教育理念のスローガンのように思われていますが、厳密な史料分析から必ずしもそうではないことがわかります。この言葉は、同志社創立十周年の記念式典の演説(式辞)の中で新島が「思わず」発してしまった言葉というほうが適切でしょう。1885(明治18)年12月18日(11月29日の創立記念日より20日ずれているのは新島の帰国を待っていたため)午後1時半に、体育館(記録では「運動場」となっていますが今日は室内の「体育館」のこと)において新島の口から思わず発せられたものです。それでは新島はなぜそのような言葉を述べたのでしょうか。

それは、新島が海外出張による留守中に、5回生の林^{ハヤシ}君という一人の学生が重大な問題を起こし、退学処分を受けたことを受けてのことでした(本井康博「退学者に注ぐ涙—新島伝説を追う—」火曜チャペル・アワー「礼拝」記録1994年9月27日 月刊チャペル・アワーNo.200 1994.12.20)。新島がこの学生の将来を嘆き悲しみ、涙ながらに思わず感極まって口走った言葉なのです。つまり、その言葉は、抽象的な難しい思想や理念ではなく、林君という具体的な一人の学生個人を想起しての言葉であり、少なくとも上から目線の学校長の抽象的な人生訓とか、理想の教育を語るスローガンではなかったのです。

新島はこの記念式典に臨席した知事を含む来賓の前で、通常であれば、学生退学にまつわる触れられたくない学内の具体的な不祥事、不始末を包み隠さずに涙をもって語り、学校長としての自責の念も表明するなかで、一人の学生の大切さを力説しました。現在であれば、このようなフォーマルな式典での「場違い発言」か、あるいは「場の空気の読めないKY発言」として非難されるかもしれません。しかしながら、そこにいた当時の学生たちの懐古によると、「満場一人トシテ袖ヲ濡サル者ナカリキ」というほど、その印象は強烈で、後にいたるまで反響も大きかったようです。それは山室軍平も語っているなど一つの語り草にもなるほどでした(同志社社史資料室『追悼集』二 1988年 314頁~336頁)。

重要なことは、ここで言う「一人」は、抽象的な意味ではなく、具体的に5回生の林君という一人の大切な学生を思い浮かべた、具体的な言葉であったということです。

この言葉の伏線

実は、この言葉の伏線にあったのが、新島が直前にアメリカの友人に残した以下の手紙です。「私がもう一度教えることがあれば、クラスの中でもっともできない学生にとくに注意を払うつもりだ。それができれば、私は教師として成功できると確信する。」(『現代語で読む新島襄』丸善 2000年 179頁 原文は英文)

新島は、この時40歳代のまだ若いとは言え、この頃、心身ともに衰弱してきており、多忙も重なり、かつてのように教壇に自由に立つことができないジレンマを覚えていたようです。事実、この5年後には召天しています。ですからここで「もう一度教える」と言ったのですが、驚くべきはその後の「クラスの中でもっともできない学生にとくに注意を払う」という言葉です。これを当たり前に思ってはけません。明治のこの時代に、「クラスの中でもっともできない学生にとくに注意を払う」と言うのは、特殊教育や福祉が普及してきた今日であれば、それほど珍しいことではないのですが、この時代、強いもの、賢いもの、偉いものに焦点づけられ、教育も富国強兵的な国家政策にはめ込まれた時代ですから、当時であれば異例中の異例です。

ルカによる福音書の「99匹の羊」のたとえ話

では、新島がこのような言葉を述べる背景にあったものは、一体何だったのでしょうか。実はこれは、聖書箇所イエスの一匹の羊への眼差しを想起させるものだと思います。「クラスの中でもっともできない学生にとくに注意を払う」、あるいは「一人一人は大切」という「不思議」な発想を時代と逆行して新島襄が抱いていたのは、新島由来というより、彼のキリスト者としての信仰の土台としていた聖書由来と言うべきでしょう。

それは端的に言うところ、冒頭で読みましたイエスのたとえ話です。「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか。」(ルカによる福音書 15章4節)という有名な99匹の羊のたとえ話です。

この話は有名な話ですが、迷った羊の行動に非があったことを叱責しているのではないし、残りの99匹の羊はどうなってもいいとか、それをどうすべきか、ということに主眼が置かれているわけではありません。また、組織の全体性や効率性のことを問題にしているのでもありません。むしろ、ここでは、弱い立場の迷える一匹の羊を大切に想う羊飼いの情熱を強調して語っているのだと思います。つまり、それはイエス自身の社会から疎外される「失われた人」への常識外れの情熱が主題となっているのでしょう。常識的に言えば、「99匹もいるのだから1匹くらいはいいのでは・・・」ということになるのですが、しかし、イエスは、価値なきものと思われている小さなもの、失われた一匹の羊こそそれを大切に想い、それに対して自らの命を犠牲にしてまでもそれを捜す価値があるものとみなしているのです。イエスにとって「一人」、しかも「迷える弱い一人」がかけがえのない宝物だということです。

たとえ話の背景

このたとえ話の背景をもう少し考えてみましょう。つまりこれは誰にどんな目的で語られたのかということです。このたとえ話の前にある1節から3節には以下のように記されています。「徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、『この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている』と不平を言いだした。そこで、イエスは次のたとえを話された。」(ルカによる福音書 15章1ー3節)

ここで言う、徴税人(当時ローマ皇帝に納める税を請負った人たちで、ユダヤ社会では、ローマ皇帝の手先になって、同胞の苦しみを食い物に私腹を肥やす者として忌み嫌われていた)、罪人(多くは職業上で律法を無視し汚れた生活をせざるをえない階層の人たちを指しており、遊女、娼婦など)は、当時のイスラエル社会の中心から周辺に追いやられたいわゆる疎外された「嫌われ者」「のけものにされている人」です。一方で、宗教家であるファリサイ派、律法学者たちとは、当時の社会において「偉い人」「尊敬されている人」、いわゆるまじめな人たちでした。彼らは律法を厳格に守る者だけが「義人」であり、神からの祝福にあずかる者で、その意味で自らを「義人」としていました。そして、それができない遊女、徴税人、病人、障がい者、貧困者たちを「罪人」、「汚れた者」として蔑んでいました。彼らは、罪人に触れると汚れるとして、近づくことも避けていました。一緒に食事をするなど、もつてのほかでした。当時、イエスは、「罪人の友」としてこの周辺に追いやられた人たちと喜んで食事をし、積極的に交流し、徴税人、遊女たち、障がいをもつ人たち、病に苦しむ人、など社会の底辺で苦悩する人々と共にありました。

これに異を唱えたのは、宗教の指導者たちの律法学者やファリサイ派たちでした。これがこのたとえ話の背景です。ここに、キリスト教の本質があります。つまり、誰か神に招かれているかという問いです。キリスト教には、特に日本では、根本的誤解があります。「クリスチャンってまじめな人間」「まじめに努力したら救われると思っている人」が日本では蔓延っているようです。たとえば、よく聞く言葉に「クリスチャンなのにそんなことを言ってもいいのですか」「もっとまじめになったら、教会に行きます」「こんな汚れた状態で教会にはいけないので・・・」これらは、ここで言うイエスの罪人たちへの招きの真意からすると真逆であるわけですね。イエスは、義人(と自称している)ではなくその罪人たちを招かれたのです。これがキリスト教の正しい理解となります。このたとえ話の背景は、まさにそのことを語っています。

迷子になった羊

再度、このたとえ話の中身に戻りますと、4節に「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけてすまで捜し回らないだろうか。」と記されています。

ここに書かれているのは驚き話です。普通の話ではないのです。皆さん、もっと驚かないといけません。神のなさる大逆転劇だからです。今の社会と逆です。99匹の羊が大切に、確かに一匹の羊がいなくなったのは残念だが、「でもまあ99匹いるからいい」というのが現代社会の眼差しではないでしょうか。いや、これこそ、当時のファリサイ派や律法学者という宗教家の正直な思いだったのでしょう。だからイエスは敢えて彼らに対して挑戦的に語られたのだと思います。

一匹を見失ったとありますが、マタイによる福音書18章10-14節では、「迷い出た」となっています。わかりやすく言うなら「迷子」になった一匹の羊ということになります。皆さんは迷子の体験がありますか。私は3歳ぐらいの頃、母親と逸れて迷子になり、交番にいたことを今も覚えています。お巡りさんからビスコをもらったことも。そして母親が捜してきてくれて抱きしめてもらった感覚を今ですら覚えているのです。50年以上前のことなのに覚えているのです。迷子になると凄く不安ですが、でも見つけてもらったら心底嬉しいからなのでしょう。

ところで、ある時、アメリカに行くためにシカゴの空港の入管手続きで並んで待っていた時のことです。そこに、子連れのお父さんがたまたま一緒に並んでいました。ちょっとおしゃべりをしていて、その瞬間に彼の息子さんが突然いなくなったのです。すると、このお父さんは血相を変えて「ケイレブ！」って大声で叫んで息子を捜し回っていました。広い空港中に響き渡る声でしたが、あまりの大声で今でもその声を思い出します。周囲は騒然としました。ほどなくして、いなくなっていたケイレブ君は、無事に見つかりました。なにやら風船を追いかけてしまい、お父さんを離れてちょっと遠くへ行ってしまっていたようです。お父さんは、恥も外聞もなく、息子を見つけると一目散に走り寄り、抱きしめていました。そして本当に嬉しそうに大喜びで戻ってきました。このお父さんの気持ち、私も3人の子育てをしましたのでよくわかります。ケイレブ君という「一人」はお父さんにとって大切な「一人」だったのです。

「失われたものを捜して救うために来た」

この場面からふと、イエスが言ったルカによる福音書19章10節「人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである」という意味がなにか腑に落ちたように思えたのです。いなくなったけど、まあいいかでは済ませられないのです。イエスにとって「失われた一人」とは、かけがえのない一人であり、そのために命を犠牲にするような一人だったのです。自分が一番大切なものを想像してみてください。もしそれが、なくなったらどうするでしょうか。ちょっと捜してみても見つからなければ、まあいいかでは済まないでしょう。もしそうであるなら、最初からそれほど大切にできなかったということなのでしょう。イエスが問題にしているのは、この点だと思うのです。当時の宗教家であった律法学者やファリサイ派の人たちは、律法を教え、机上では隣人への愛を説いていたのかもしれませんが、失われた人など眼中になく、実はどうでもよかった。ましてや、その人が立ち返ったからと言って喜びなどなかったのです。この状況をイエスはお見通しであったのでしょうか。

「そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』と言うであろう。」(ルカによる福音書 15章5-6節) イエスはたとえ話を続けていますが、まさにこの喜びこそが、イエスの喜びであり、それを聞いている律法学者やファリサイ派の人との対比が顕著です。「友達や近所の人々を呼び集めて」喜びとは、ややオーバーな喜びようですが、それほど失われた一匹の羊が大切にできるかを伝えているのでしょうか。

「99匹いるからいい」というのは現代社会の冷たい合理性ですが、もし大切ならばそんな数字では割り切れない、もう一つの世界観があるのではないのでしょうか。イエスにとってもそうですが、ケイレブ君もそうですし、冒頭で話した新島襄にとっても、一人の退学していく学生こそはその意味で本当に大切な学生だったのでしょうか。

悔い改め(メタノイア)、探す

「言っておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある。」(ルカによる福音書 15章7節) の言葉にある「悔い改め」は、ギリシャ語原文ではメタノイア $\mu\epsilon\tau\alpha\lambda\upsilon\omicron\upsilon\sigma\iota\varsigma$ です。しばしば日本語の「悔い改め」という用語には、なにか道徳的なニュアンスが強く、後悔したり、悪事を反省するという意味になります。しかし、メタノイアには本来そういう意味はありません。メタ(超えて)・ノイア(思考)とは、発想の転換とか、観点を転換して俯瞰してみる、などの意味です。いわば「発想転換」「方向転換」とでも言うべきではないでしょうか。

ところで、「失われた」側はメタノイア(方向転換)をしたわけですが、実際にその羊が自らの努力で羊飼いを捜しあてたのではなく、実際はその逆です。実は捜して歩いたのは、迷った羊ではなく、羊飼いのほうだったのです。ちょうど迷子になった幼児であった私を母が捜してくれたように。またケイレブ君をその父親が必死で捜したように。迷子になったら何が必要なのでしょう。実際、迷子は何もしていないのですが、自分が迷子になっているという自覚、つまり「罪人」であるという自覚が必要です。ある面で、これだけです。実はキリスト教の福音の原点はそこにあります。聖書には「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。」(ヨハネによる福音書 15章16節)とイエスは述べていますが、人間の側が神を探求して捜し求めて、ようやく見つけたという哲学的な神ではなく、神のほうが一匹の羊を必死で捜す、というのがキリスト教の福音の本質と言っていいでしょう。

ですから、人間の側はメタノイアして、自分は罪人であるという自覚があって、捜してもらおうのを待っていればいいのです。「失われた人を探して救うために来た」とイエスが言われる通りです。となると、方向転換しない99匹の羊とは、自分は「迷子」だとは思っていないので、羊飼いや必要ないと思っている羊たちとなります。それは羊飼いの本当の心を知ることがない、羊たちであったということになるのでしょうか。

失われた一人「活信」

最後に、私自身のことについてお話したいと思います。実は私自身もほかでもない、神によって捜された一匹の迷える羊であったという自覚が常にあります。

古いアルバムに私の誕生のときに母が記した寄せ書きがあります。そこにはこう書かれていました。「活信君 貴方が生まれる前 母さんは大変だったの。先生は生むのを反対されたの。でも母さまも父さまも神様におゆだねし祈りつつ貴方を生んだのよ。死ぬはずだったのに生まれたから信じて生きるという意味で活信と名づけたのです。」

実は私がお腹に宿った当時、母親は出産に耐えられない重い病気を患っていたようです。母体安全のため医学的には出産が認められず、私はこの世に生まれるはずがなかったのです。医師は「三人もいるからいいじゃないですか」と出産を認めなかったとのこと。ある意味、当然の専門家の合理的判断だと思えるかもしれませんが。しかし母は違っていました。そんな胎児を、ただ愛おしかったという常識破りの母の愛と、そして科学的には根拠がないにもかかわらず、ただこの子は「信じて生きる」という型破りな父の信仰と、両親の文字どおり命をかけた覚悟により、この世に生を受けたという事実の前に驚愕しています。私の名前「活信」はそれに由来するわけです。

母としては、「胎児の権利を守る」「堕胎禁止」等の高尚な理念上の愛でなく、「自分のお腹に宿った瞬間から母親としてただ愛おしかった。この子のために自分が犠牲になってもいいと思った」というのです。これが私の出生の原点です。将来どんな立派な人間になるとか、役に立つ(doing)とかに関係なく、まだ何の活躍もしていない胎児の存在(being)そのものを愛する母の愛は、「九十九匹の羊」を野原に残してでも「失われた一匹の羊」を命がけて捜し歩くイエス様の姿を思い起こさせてくれています。

終わりに

さて、今日は、新島襄の「一人は大切なり」という言葉の背景と史実に迫り、そこからその話の根底にあるイエスのたとえ話、一匹の失われた羊と99匹の羊について考えてみました。新島襄が具体的な一人の学生に目を向け、「諸君ヨ、一人は大切なり」と涙ながらに訴えたその真意が、今の私たちにとって、改めて問われていると思います。

それでは最後に一言お祈りします。

天地万物の創造者であり、歴史を支配しておられる主なる神様、その偉大な御名を賛美します。新島襄がかつて説教したこの礼拝堂で、今日、私たちは、「諸君ヨ、一人は大切なり」という言葉に思いを馳せ、そして主イエスが教えてくださった「失われた」「一匹の羊」への情熱について改めて考えることができました。

どうぞ、今、「迷える」「一人」を捜しておられる主イエスが、そのところで共におられ、その豊かな愛と恵へと導かれますようにお祈りします。

尊き主イエス・キリストの御名によって祈ります。

アーメン